

第 17 回日本臨床腫瘍学会 (JSMO) 学術集会 参加レポート がんゲノム診療 元年 —Novel, Challenge and Change—

山口 祐平

京都府立医科大学 医学部医学科 第 6 学年

国立がん研究センター中央病院 乳腺・腫瘍内科 任意研修生

令和元年 7 月 21 日

令和元年 7 月 18 日から 20 日の 3 日間、国立京都国際会館にて、第 17 回日本臨床腫瘍学会 (JSMO) 学術集会が開催されました。夏の京都の暑さに雨天が重なりましたが、参加者は 7,600 名以上と過去最多で盛会のうちに終了しました。大会長の藤原康弘先生、国立がん研究センター中央病院乳腺・腫瘍内科の先生方、素晴らしい学術集会を企画・運営してくださり、心より御礼申し上げます。

JSMO 学術集会は今年から毛色がガラッと変わりました。特筆すべきは英語セッションの数々です。一般口演の英語によるプレゼンテーション・質疑応答はもちろんのこと、海外の著名なオンコロジストを囲んで英語でディスカッションする少人数プログラムが充実しており、国際化を意識した JSMO の新たな潮流を感じます。



まだ学生の筆者は、教育講演を中心に聴講いたしました。腫瘍免疫学、高齢者のがん診療、がん緩和医療など総論的なものから、各がん種の薬物療法のトピックスを紹介する発展的なものまで、臨床腫瘍学を網羅する構成で大変勉強になりました。

Olaratumab の ANNOUNCE 試験がネガティブに終わり、ここ最近では暗いムードだった肉腫の治療開発ですが、2 日目の肉腫オーラルセッションでは、期待のもてるデータを 4 名の先生方が発表されました。日本の研究成果が世界に発信されるのは嬉しいことです。最後は小島勇貴先生 (国立がん研究センター中央病院乳腺・腫瘍内科) が各演題に対して的確なコメントでレビューでされ、セッションが終了しました。

最終日には「希少がんにおける医療連携とトータルケア」と題してパネルディスカッションが開かれ、JSTAR 理事の安藤正志先生 (愛知県がんセンター病院薬物療法部)、上田孝文先生 (大阪医療センター整形外科)、細井創先生 (京都府立医科大学附属病院小児科)、評議員の細野亜古先生 (国立がん研究センター東病院小児腫瘍科/乳腺・腫瘍内科) がご登壇されました。肉腫をはじめとする希少がん診療の特殊性や問題点を洗い出し、その解決策を十分に議論できる機会はなかなかありません。セッション終了後は、国立がん研究センター希少がんセンターの加藤陽子さんをはじめ希少がんに関わる先生方を交えて記念撮影をしました。



希少がんに関わる先生方と



新たな出会いと久しぶりの再会も、学術集会の醍醐味です。この3日間で何人の方に自己紹介・近況報告したか、数え切れません。まだ専門性が決まっていない学生という立場だからこそ、いろいろな分野の方々との交流を深めることができます。

希少がんの治療開発が、肺がん、乳がん、消化器がんなどの common cancer の治療開発から学ぶことはもちろん多いですが、一方で common cancer も、遺伝子パネル検査に基づいた治療を考える上ではそれぞれのフラクションが希少がんになります。そういった意味で臓器横断的ながん診療が今後ますます重要になることを確信するとともに、学術集会のテーマ「がんゲノム診療 元年—Novel, Challenge and Change—」を見つめ直す3日間となりました。

運営事務局の先生方、改めておつかれさまでした。次回の JSMO 学術集会は西尾和人先生（近畿大学ゲノム生物学）主催のもと、同じく国立京都国際会館で令和3年2月18日から20日の3日間の予定となっております。極寒の冬の京都で熱い議論が交わせるよう、自身も邁進していく所存です。

最後に、第2回 JSTAR 学術集会長の高橋俊二先生（がん研究会有明病院総合腫瘍科）と第3回 JSTAR 学術集会長の上田孝文先生（大阪医療センター整形外科）との3ショットで、JSTAR の宣伝とさせていただきます。JSMO 同様、JSTAR も待ち切れないですね。



JSMO2019 運営事務局の先生方と



JSMO × JSTAR

最後まで読んでくださった先生方、ありがとうございます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

July is Sarcoma Awareness Month